

ヘンリー・ジェームズのアメリカ観 (6)

藤野 早苗

I

『使者たち』(1903)の主人公ストレザーはニューイングランドの田舎町ウーレットから旅をして、イギリスの古い町チェスターに到着するが、程なく、ホテルのロビーでマライア・ゴストリーという女性に出会う。この時点で彼はこの女性の背景も、内面も何も知らないのだが、彼女の「質素ではあるが一点の非の打ちどころもない身だしなみ、地味ではあるが金目をおしまぬ粹なところ」に強い印象をうけ、「今までに出会ったことのない特質をもった人」(I, 8)⁽¹⁾と判断する。ストレザーは彼女の「外観」によって即座にこのような判断をしているのだ。

物語の導入部分での主人公のこの判断は、この小説の背景やテーマを暗示するものである。前記のストレザーが受けた印象からは、彼が故郷の町で見慣れてきた女性たちがおそらく派手で、きらびやかな、いかにも富を見せつけるような、趣味の悪い服装をしていたのであろうことが推測できる。つまりヨーロッパに降り立ったばかりのストレザーは無意識のうちにアメリカとヨーロッパの対比をしていることがわかる。このことは物語をとおして常にストレザーのなかで二つの文化の対比があるであろうことを示唆すると同時に、彼がヨーロッパ的な価値に強く惹かれる傾向にあることを示している。さらにストレザーが外観によって即座に判断しているところに、この小説が消費文明の時代を背景とするものであることが窺がえる。

ヘンリー・ジェームズは1876年にイギリスを定住の地とするが、アメリカ

人やアメリカ社会への関心をもち続け、国際的な状況を生かした小説によって、アメリカ人たちの行動や意識の変化を追ってきた。ジェームズに鋭い時代認識があることは、彼の描く人物像にあきらかだ。19世紀はアメリカが目覚ましい経済的発展を続けてきた世紀だが、その過程でアメリカ人のヨーロッパに対する認識や接し方も変化してきたことをジェームズの小説の人物像は示している。たとえば『アメリカ人』(1877)のニューマンは独力で築いた莫大な財力をもって、最高のものを手に入れようとヨーロッパにやってくる。なかでも彼が一番願ったのは最高の女性を妻とすることであった。そんな彼にとって、美しく洗練されていて、しかも、没落してはいるが貴族階級であるサントレ夫人は願ってもない相手であったのだ。自分の富をもってすれば彼女との結婚も不可能ではないと信じた彼だが、結局財力への過信は文化の壁に阻まれることになる。

『デイジー・ミラー』(1878)では、ヨーロッパを旅しても、アメリカにいたときと同じように気ままに振舞っているデイジーを、ローマに在住のアメリカ人たちが排斥する。そこには旧世界の伝統ある文化に対してアメリカが粗野な国であることの強い認識がある。また『ある婦人の肖像』(1881)のイザベルは読書から得た豊富な知識をもとに自分の目で検証する意欲にもえてヨーロッパにやってくる。だがヨーロッパの洗練への極度の憧れから、マール夫人の実態を見抜くことができず、不幸に陥ってしまう。

このように初期から中期にかけての作品では旧世界と新世界の文化の違いを強く意識する人物像が多くみられ、ヨーロッパの洗練に憧れるアメリカ人の姿が印象に残る。しかし消費社会の到来とともに、ヨーロッパ社会自体も変容していき、また強大な経済力をもつアメリカ人の意識にも変化が見られることをジェームズの描く人物像は示している。

1855年に第一回のパリ博覧会が開かれた。その後もヨーロッパやアメリカの各地で定期的に行われるようになったこの博覧会は商業活動の規模や形体を大きく変えたことをレイチェル・ボウルビーは指摘している。(122)つまりそれまでと異なり、バイヤーは博覧会に赴き、出品された商品を「見る」ことが仕入れの重要なプロセスになるので、視覚に訴える商品の外観、ディ

スプレイの仕方が何よりも必要になる。とりわけ1900年にパリで開かれた博覧会はまばゆいばかりの光のスペクトルであったようだ。

ジェイムズは1899年の3月に、5年ぶりにパリに旅行している。次に引用するエドワード・ウォレン宛の手紙には彼の目に映ったパリの姿が記されている。

パリはすごい—新しく、贅沢で途方もない豪華さの顕示だ—まったく果てしなく広がっている。常習的に博覧会のような……まるで国家のデカダンスの巨大な花のような。物質的な喜びや、目を楽しませることを目的として建てられた巨大な聖堂ともいえる。あたかもその他のパリらしい積み重ねに取って代わって、国の力をすべてそこに寄せ集めているかのように。(エデル 262)

この文面からは伝統的な文化の積み重ねを圧倒するような、きらびやかなパリの様相に戸惑い、辟易とした様子ジェイムズの姿が髣髴とする。1903年に、一年間にわたって『ノース・アメリカン・レビュー』に発表された『大使たち』はこの時代のパリを舞台としている。本稿はストレーザー、および彼の意識をとおして描き出される他の登場人物たちが、ヨーロッパにも浸透してきた消費文明の時代に、ヨーロッパに何を求め、何を吸収していったのかを分析することにより、ジェイムズが新しい世紀のアメリカ人、およびアメリカ社会をどのように展望していたのかを考察する。

II

『大使たち』についての最初の言及は1895年10月31日の「ノートブック」に見られる。「力のかぎり生きたまえ。そうしないのは間違いだ。君が真に生きているかぎり、特に何をしようか問題ではない。人生を生きなかつたら、ほかに何かあるというのだろうか……生きたまえ！」と小説家 W. D. ハウエルズが語りかけたことを友人のジョナサン・スタージスから聞き、ジェイムズはそこに小説の胚芽を見出した。同日のノートにはその小説の主人公

についての構想が記されている。それによると、その人物は「感覚とか情熱、衝動、さまざまな喜びを味わうという意味ではこれまでただの一度も生きたことのない初老の男」であって、「心から喜びをもって何かを経験したことがまったくなく、ただ義務と良心のために生きてきたにすぎず……知ったのは、敗北と自制と犠牲だけである」ということだ。

そのような人物としてどんな職業が適当であるか検討したあげく、主人公ストレザーは雑誌編集者とすることに決めている。その過程で「単なる実業家」にすることも考えたが、「知性に欠ける」(141)のでやめたことが記されている。ジェイムズは実業家を「典型的なアメリカ人像」として文学で扱う必要性を考えてはいたようだが、⁽²⁾ 意識のドラマであるジェイムズの小説の主人公には知性に欠ける実業家はやはり不適當であったのだろう。

小説に描かれるストレザーは富裕なニューサム夫人が後援する評論雑誌の編集長である。彼は夫人の一人息子のチャドがパリに赴いたまま帰ってこないで、連れ戻す命を受けてヨーロッパにやってきたのだ。首尾よく連れ戻した暁には夫人と結婚することになっている。

ストレザーは出発前には「非常に疲れている」という状態だったが、イギリスの古い町チェスターに到着するや否や、開放感で生き生きとした気分になる。それはどのような背景によるものであろうか。まず彼は商業主義のアメリカ社会においては成功者ではない。「ぼくは金儲けなんてしたことがないんです。ぼくはまごうかたない完全な失敗者なのです」(I, 44)という彼の言葉が示すように、ストレザーは過去にさまざまな職業を試みたが、いずれも経済的成功に結びつかなかったばかりか、真に情熱をもってうちこめた仕事もなかった。彼が編集長をつとめる評論雑誌も資金はほとんどニューサム夫人が出すことでどうやらまかなっている。その雑誌とても満足のいくものではない。なぜならその雑誌の中核をなしているのは経済や政治、倫理であって、文学などは、彼の意に反して、ニューサム夫人の考えでは「[中核を包む見かけだおしの殻にすぎない」(I, 88)ものであったからだ。したがって雑誌の表紙には彼の名前が印刷されているものの、ストレザーのアイデンティティはきわめて不確かなものである。このような状態での夫人と

の結婚の見通しは経済的安定が約束されてはいるが、彼の精神状態を満たすものとは考えにくい。夫人との結婚の約束があってヨーロッパに赴いたことは間違いないのだろうが、そうであればこそ、その見通しのもとに「疲れている」感じがよけいにしたとも考えられる。商業主義のアメリカではストレザーの納得できる価値は見いだせそうにない。しかもストレザーはピューリタンの窮屈なモラルのもと、楽しむことを罪悪と考える生き方をしてきたのだ。

ストレザーがチェスターの町を歩いて、何とも言えない開放感を味わうのは、はるか昔の若い日に新妻とともにヨーロッパ旅行をして、心に誓った誓いを思い出したからだった。当時ヨーロッパのより高い文化に接触したことで、自分が何か偉大なものを手に入れたと信じ、それを保存し、大切に伸ばしていこうと計画したものであった。だがその後の彼の生活はそのような計画を実現するよしもないものであった。長い間忘れていたそんな思い出が今よみがえるとともに、自分の生活がこれぞといった威厳もない、良心にそむいたものであったことを考えさせられたのである。つまりストレザーにとっては、ヨーロッパは25年前の若い日、彼の心に呼び覚まされた高い文化の象徴としての印象が強く、今それを再確認した彼は、ウーレットでの退屈な日常性からの脱却の可能性を探りたい気分になったのであろう。

チェスターのホテルで出会ったマライアの洗練された服装に、ストレザーは今までに知らない価値を見出し、「なるほどこの女性のほうが、いっそう完全に洗練されている—」(I, 9)とすぐさま心のなかでニューサム夫人と比較する。まだマライアのことは何も知らないのに、きわめて自然にこのような比較をすることは、冒頭で述べたように、ストレザーも外観で判断する消費文明に生きている人間であることを示している。この後も物語の進行の過程で、彼は物事を外観で判断する場面が多くある。そしてそのような判断で不十分なところは想像力で補うのだ。真相を見極めない彼の判断は正しくないことを物語は証明していくことになる。ストレザーは想像力豊かな人間として描かれているが、彼の想像力の根底にはヨーロッパ文化への憧れがあることを見逃してはならない。

ストレザーと好対照を成すのが、彼の友人のウェイマーシュである。弁護士として成功して、財産もあり、自信にみちている彼はアメリカ社会に満足で、絶対の信頼を置いている。だからヨーロッパの文化には何の憧れもないどころか、あらゆることが気に入らない。どこの国へ行っても、「得るところがほとんどなかった」(I, 30) と思っている。不機嫌な顔をしながら、「自由」を求めて宝石店で衝動的に買い物をしたり、女性に高価なプレゼントをして満足するウェイマーシュは、いかにも経済力を優位の証拠と考える商業主義のアメリカ人らしい。

ところでこの時代に、ストレザーとウェイマーシュのどちらのタイプがより一般的なアメリカ人であったかと考えると、それはウェイマーシュであつただろうと思われる。ストレザーを一目で気に入ったらしいマライアの次のような言葉から、当時ヨーロッパを訪れたアメリカ人の状況が想像できる。

あなたが失敗者であつて、わたし、ほんとにうれしいわ—だからこそ、わたし、あなたはほかの人とちがうと思うのです。このごろでは、失敗者でない人なんて、身ぶるいがしますわ。周囲をごらんください—成功した人たちを見てごらんなさい。名誉にかけて、そんな連中の仲間入りはごめんだと、お考えになりませんか？ (I, 44)

マライアは一見してストレザーが他のアメリカ人たちと異なるゆえに、彼に好感を持ったことがわかる。彼女はアメリカの商業主義を嫌い、ヨーロッパの伝統的価値に魅せられて、ヨーロッパを住家としているアメリカ人なのだ。彼女は根本的にストレザーと価値観が同じであると考えられる。

III

チャドを連れ戻すという使命を負ったストレザーは「使者」らしく、ウーレットの人々の固定した見方をもって、ヨーロッパに来たのだった。つまり、彼はチャドが悪い女の誘惑にかかって墮落しているにちがいないので、救い出さねばならないというピューリタンの偏見を共有していたのだ。そ

のほかの可能性など考えられなかった。だからマライアに「チャドさんが住むすばらしい都会を考えてみると、チャドさんの変わり方について、二通りの、まったく反対の場合が考えられますわ。墮落したかもしれませんが、反対に洗練されたかもしれないのです」(I, 69)と、ウーレットの見方が間違っているかもしれないことを指摘されると、一笑に伏してしまう。

だが実際にチャドに会ってみると、かつての粗野だったチャドはきりっとして、すっかり洗練された紳士になっている。その姿を見て、ストレザーはウーレットの見方は修正する必要があると考えはじめる。このように見かけによって判断を下すストレザーにマライアはじっくり時間をかけてみるようにと忠告する。しかし外観によって判断するのはストレザーに限ったことではなく、むしろ一般的傾向であったことが、次のバラス嬢の言葉から推測できる。

わたしたちはみんなお互いを見つめあっています—でも外観しか見ていないんですわ。それはパリの光のせいですわ。パリの光はいつもうわつつらしか見せないんです—いとしいパリの光のせいですわ。

(I, 207)

ストレザーの特徴は外観の判断でわからないところを想像力で補うことであり、その想像力の根底にはヨーロッパの文化に対する憧憬があることはすでに述べた。その典型的な例がヴィオネ夫人についての判断である。チャドに連れられて夫人の家を訪れたとき、ストレザーはその家の趣ある古さと、奥ゆかしい調度品や美術品に圧倒される。それは掘出しものを集めたマライアの小さい美術館のような家や、チャドの美しい家と違っていた。マライアやチャドはひたすら買い集めているのに対し、ヴィオネ夫人は祖先から引き継いだものを趣味よく飾っているように感じられたのだ。ストレザーは「あたり一面にゆきわたっている、個人的名誉を重んじる、まごうかたなき高潔な精神」(I, 245)を夫人の部屋に感じ取る。そしてその趣味のよい家に生活する夫人は上品で、美しく、「いく度も噂に聞き、本で読み、心に描いて

は見たが、しかし、一度も出会ったことはない、あのたぐいまれな女性のひとり」(I, 252)と思われるのであった。だから、この女性こそチャドを道徳的に向上させたと確信するのであった。このようにストレザーはヴィオネ夫人をヨーロッパの伝統文化の象徴として崇拜し、できるかぎりの助力を約束する。

さらにノートルダム寺院で祭壇の前で祈っているヴィオネ夫人の姿を偶然見たストレザーは、チャドと彼女の関係が不純なものではないという確信を強める。なぜなら彼は伝統ある寺院の荘厳な美しさにひきこまれ、そこに祈る夫人の清廉潔白を当然のことと受け止めたのだ。「あなたはむしろ想像力過剰ではありませんか」とチャドが言う場面があるが、ストレザーの想像力を彩るものは伝統あるヨーロッパ文化への憧れであることを見逃してはならない。

ジェームズはストレザーの判断が誤りであったことをストレザー自身に発見させる。パリの郊外に散策に出たストレザーは美しい風景画のような景色の中に、あたかもその画を完璧なものにするべく浮かび出た一艘の小舟に、チャドとヴィオネ夫人の現実の姿を見てしまうのだ。

それではチャドの洗練とは何であったのか。墮落しているに違いないという見方をしていたチャドが目の前に現れたとき、あまりに洗練された青年に変貌していたので、ストレザーはそれを「向上」ととらえたのだ。だがチャドの友人のリトル・ビラムはチャドは「古い本の新版みたいなもの」(I, 177)と表現し、チャドが本質的には変わっていないことを指摘する。またマライアは「彼はあなたが思うほど良い人ではありませんよ」(I, 171)と警告する。たしかにチャドは態度、物腰も落ち着いていて屈託なく、外見はスマートな紳士になっているが、ヴィオネ夫人の言葉を借りれば、「あの人の考えは、男の人のおきまりの考えなのです一面倒なことはみんな女に押しつけようというのです」(I, 249)ということだ。ストレザーが「洗練」というとき、高潔であることをも含めているが、チャドの洗練は表面的なスマートさに過ぎず、内面をともしないものではない。結局チャドはストレザーの忠告も無視して、彼を慕うヴィオネ夫人を顧みず、金儲け

のために帰国することになる。

チャドの関心はヴィオネ夫人から事業に移行してしまっていることは疑いもない。ヴィオネ夫人との逢引をストレザーに目撃された後、落ち込む夫人をそのままにして、チャドは姿を消してしまう。それはロンドンに行き、広告の技術についての情報を入手するためだったという。どんなに広告が大切であるか、熱を込めて、たて続けにストレザーに話すチャドの様子は、完全に彼の関心がヴィオネ夫人ではなく事業の方に向いていることを示している。消費社会において、広告が重要であることは間違いない。本質的価値よりもいかに外面的な目新しさを人目につくように売り込むか、消費社会の事業の成否はまさに広告にかかっているだろう。チャドはそのことを認識して、行動に移しているわけだ。いや、まさに売り込みに説得力ある製品の見本として自分自身を提示しているとさえ言える。なぜなら「洗練されたチャド」に変身した自分をストレザーに見せ、納得させることに成功したのだから。

このようにジェイムズはチャドが時代をリードするアメリカ人実業家になる見通しをたてている。彼はもはやかつてヨーロッパを訪れたアメリカ人たちのように、骨董品を買いあさりはしないし、没落貴族との結婚を願ったりもしない。彼にとってのヨーロッパはその伝統文化のもつ「洗練」をわが身につけ、それを商売に生かす術を学ぶ場所であったことになる。

チャドが時代を先取りする有能な実業家になることを誰よりも理解しているのが義兄のジム・ポコックである。彼自身ウーレットの実業界の人間だが、チャドには自分にはない資質があると感じている。ジムは現在の仕事に専念しているだけで、チャドのように先の見通しを考える余裕はない。ジムにとって華やかなパリは働きずくめの日常からの願ってもない息抜きの場所であり、この時とばかり遊びまわって俗物根性を丸出しにしている。ジムの姿は当時アメリカからパリを訪れる実業家たち一般の姿であったものと思われる。『アメリカ人』のニューマンはわかってもわからなくても、楽しめても楽しめなくても、とにかくルーブル美術館を訪れ、あらかじめマークしておいた必見の有名な作品を見て回ったものだが、ジムはそんな無理はしな

い。ただひたすら享樂の地としてパリを楽しんでいるのである。チャドは明らかにジムとは異なり、よりしたたかである。

IV

チャドを故郷に連れ戻すという使命をいつまでたっても果たさない「使者」に業を煮やしたニューサム夫人は第二の使者として、娘セアラとその夫ジム、ジムの妹のメイミーの三人をパリに送り込む。ニューサム夫人は物語をとおして一度も姿を現さないが、その存在は非常に大きい。ジェームズは夫人を表面に出さないことによって、背後で人を支配し、事態の成り行きをコントロールするのは夫人であることを強調することに成功している。ストレザーはセアラと相對するとき、ニューサム夫人の姿を重ねあわせてしまう。またセアラの到着以来、チャドが母親の存在を強く意識していることをストレザーはマライアに話している。その間にチャドの気持は、ウーレットに戻って事業に加わることの方に、急速に傾いていくのである。

『ボストンの人々』(1886)では南部出身で、反動的な青年ランソムの言葉をとおして、消費社会の浸透とともに社会が女性化し、男性的な調子が消えていくことへの憂慮が示されていた。ランソムの言葉をそのままジェームズの考えと受け取るとは出来ないが、消費社会を嫌うジェームズが、消費の主役たる女性に迎合するような社会になることを好まなかったことは確かであろう。

次の引用から、19世紀も終わり近くになったとき、アメリカ社会においては女性が確実に力を得てきたことをジェームズは認識していたものと推察できる。

ストレザーはポコックとは違う人間だった。自分は違う方法で自分の立場を築いてきたし、要するにポコックよりも尊敬されていた。しかしそれにもかかわらず、このときストレザーが痛感したのは、セアラや、メイミーや、もっとすぐれた仕方でニューサム夫人が代表している海の向こうの社会は、本質的に女の社会であり、そこでは気の毒な

ジムは除け者だ，ということだ。(Ⅱ，83)

ウーレットの代表的な実業家でありながら，パリにきて俗物ぶりをあらわにしているジムの姿にストレザーは「実業家を取るに足らぬ人物になっても不思議はないような秘密がウーレットの生活にはある」(Ⅱ，82) ことを感じるのであった。そしてその秘密とは結婚に結びついていると考えるのだ。つまり社会的に主導権を握っているのは妻で，男はその引き立て役にすぎないのではないか。ストレザーは自分がニューサム夫人と結婚した場合，自由を失って，ジムのようになる可能性を脅威として受け止めるのであった。チャドの心がウーレットの方へ傾斜していくのと反比例して，ストレザーは益々戻る気分になれなくなるのは，一つにはセアラとジムをとおして，自由のないウーレットでの結婚生活を予測するからである。

ストレザーがチェスターでマライアに出会ったころ，彼女との対比によりニューサム夫人について思い出していたのは，夫人の堅苦しき，甘さの欠如であった。たとえばマライアは襟ぐりの大きな服に，幅広の赤いベルベットのリボンを首に巻いている。一方，ニューサム夫人はオペラに行くときは決まって高い襟飾りのついた，黒のシルクのドレスで，それは「ロマンティックとはいえない」(Ⅰ，51) ものであったことを思い出していた。

ストレザーがチャドに実際に会ってからは，チャドについてのウーレットの見方が正しくなかったことを繰り返し手紙でニューサム夫人に知らせるのだが，夫人は一向に理解しようとせず，遂にセアラを送り込んできた。ストレザーがセアラに望むのは彼が実際に見たものを，彼女も見てほしい，つまりチャドが洗練された青年に変化したこと，そしてそれはヴィオネ夫人によるものであることを見てほしいということであった。しかしセアラはチャドの変化は汚らわしいとして，頑として見方を変えようとしない。このようにあらかじめ用意した見方と異なる状況は絶対に受け入れることの出来ないセアラ，およびニューサム夫人は「冷たい考えの塊」(Ⅱ，239) であるとストレザーは結論づけるようになり，失望する。その心境を次のようにマライアに語る。

結局ニューサム夫人は、冷たい考えのこり塊みたいな人なのです。セアラは、その冷たい塊を、まったくそのままぼくたちに突きつけることが出来たのです。だからぼくたちは、ニューサム夫人がぼくたちをどう考えているか、わかったのです。(Ⅱ, 237)

ストレザーはウーレットにいたころは、ニューサム夫人を「全道徳的知的存在」(Ⅱ, 239)として受け入れていたことになるが、当時はそのことに気づかなかったことをマライアに話す。つまり彼はヨーロッパにきて、意外性に目を輝かせ、それまで見えなかったものが見えてきたわけである。

「冷たい塊」であるニューサム夫人との結婚が商取引になるのは必然ともいえる。ストレザー自身無意識のうちに、ウーレットではそれを受け入れていたわけだ。セアラは彼の気持の揺らぎを非難するとともに、「あんな特権を与えられていながら」(Ⅱ, 200)と言って、ニューサム夫人との結婚によって与えられる金銭的保障をストレザーの目の前に改めてちらつかせる。そうすればするほど、ストレザーの心は離れていくことは必然である。

セアラはパリの案内を申し出たヴィオネ夫人に対して、「わたしもパリを知っていますから結構です」(Ⅱ, 91)と高飛車な態度ではねつける。この彼女の傲慢な態度は何を意味するのであろうか。礼儀を欠いた、教養のなさ、アメリカ人の粗野ぶりを遺憾なく発揮していることはもとより、彼女がウーレットの価値基準だけで生きていることを露呈している。目の前にいるヴィオネ夫人の高貴さには目をやらず、「墮落した女」というウーレットでのレッテルを貼ったままで蔑み、寄せつけない。セアラが「知っている」パリとは、経済力を駆使しての高級なレストランでの食事、ありとあらゆる高級な買い物、ドレスをつくらせることなのだ。これはアメリカ人観光客の典型的行動パターンであり、この小説の四半世紀も前にジェイムズが批判していたことと変わらないことを、チャールス・アンダーソンは指摘している。

(264) だがセアラの高圧的な態度は経済力増強によるアメリカ人の自信の誇示であろう。それにしても文化的なものには関心を示さず、むやみに自信

を持つことで内面の発展はあるのだろうか。人間的な交流を拒否して、金銭的なものですべてを解決しようとする姿勢はなんとも冷ややかなものである。ゆえに道徳的弱さがあるとしても、感情をすなおに表現するヴィオネ夫人の方に、ストレザーはより人間的な魅力を感じるのだ。

このようにウーレットのアメリカ女性たちは魅力的には描かれていない。ただメイミーだけは現実を直視する柔軟性をもった人間として描かれている。つまり、メイミーだけはチャドの変化を理解したのだ。彼女は本来ウーレットの見方を共有していて、自分こそチャドを更生させようと意気込んでパリにやってきたのだが、会ってみるとチャドはすでに別の女性によってすっかり立派になっていることを認める。道徳的に墮落したものを更生させようという意気込みはいかにもニューイングランドの女性らしいが、かたくなではないところがセアラとは大違いだ。またストレザーはジムの俗物ぶりを理解しているのもメイミーだけだという。メイミーは偏見に固執することなく現実を見ることができ、自分の感情を抑えて振舞うことができる、年若くても成熟した女性として描かれている。ヴィオネ夫人の娘のジャンヌの幼さが強調されるのとは対照的に描かれているのだ。

V

ストレザーはチャドがヴィオネ夫人の影響で別人になったと受け止めたからこそ、チャドが夫人を見捨てて帰国するならば、「チャドはわが身を恥ずるべきだ」(I, 285) と考える。だが、そんなことは絶対にしないと口にしなから、チャドの関心は広告の技術を獲得することに移ってしまっている。つまりチャドが変わったように見えるのは表面的なものだけであって、内面は少しも洗練されていない、金銭的価値が優先するウーレットの人間に変わっていない。彼には美を真に解するだけの知性も感覚も欠如しているのだ。本質的な価値とは関係なく、表面的にわが身を洗練させたチャドも、またそういうチャドの表面をみて洗練された人間になったと受け止めたストレザーも、いかにも消費文明の時代の人間だといえる。

『使者たち』はアメリカのみならずヨーロッパも消費社会になっているこ

とをあらわにしている。殊に伝統的文化の都であったパリは博覧会に触発されたように、きらびやかな消費都市へと変貌がめざましいようすが描かれている。そんななかでも、ストレザーがウーレットにはない豊かな文化的価値をパリに見出していくのは、25年前の印象に基づく憧れが根にあることはまちがいないが、その憧れの具現をヴィオネ夫人にみたからであろう。夫人には消費文明が作り出した人間にはみられない、長い伝統の積み重ねからのみ滲み出る落ちつきと美しさがあるのだ。ストレザーはヴィオネ夫人を「女神」のイメージで見るほどに美化している。だがチャドにとって、夫人はウーレットの「賄賂」と見比べて、棄てることになる価値しかもたないのだ。

新しい感覚と広告技術をもって事業拡張をはかるチャドはアメリカの新しい時代の実業家として成功していくだろうことが暗示されている。彼を迎えるウーレットは益々栄えていくであろう。

すべてを捨てたストレザーはなぜウーレットに帰っていくのだろうか。「正しくあるために」とストレザーは言う。彼に事実上の求婚をして、受け入れられなかったマライアは「あなたという人は、現実に正しい人だというよりはむしろ、どうするのが正しいかということについて、あまりにも恐ろしく鋭い眼を持ちすぎていらっしゃる人なのです」(Ⅱ, 327)と抗議するように言うが、彼女の言葉はストレザーをきわめて適切に表現している。ピューリタンの堅苦しさや不寛容を嫌うストレザーだが、ピューリタンの別の面である良心とか正義、公平を重んじる心などが彼の行動の基調となっているところは、彼もピューリタニズムの風土で育った人間であることを物語っている。

19世紀が終わり近くなったとき、新しい世紀にアメリカが経済的發展を続けていくことは当然予測されたであろうが、経済力を裏づけとしたアメリカ人の過度の自信や不遜な心をジェイムズは危惧していたのではないだろうか。ジェイムズは自分の目でアメリカを見つめるべく、1904年に20年ぶりにアメリカを訪れることになるのだ。

注

- (1) 引用文の邦訳は『使者たち』については工藤好美，青木次生訳を参照。
その他はすべて拙訳。
- (2) *Literature* に掲載された “American Letters” (1898) というエッセイのなかで，ジェームズは「典型的なアメリカ人」像は実業家であるから，作家や劇作家は実業家をもっと扱うべきだと書いている。

引用文献

- Anderson, Charles R. *Person, Place, and Thing in Henry James's Novels*. Durham : Duke UP, 1977.
- Bowlby, Rachel. *Just Looking*. New York : Methuen, 1985.
- Edel, Leon. *The Treacherous Years*. New York : Avon B., March 26–July 9, 1898,
- James, Henry. *The Ambassadors*. 1903. *The Novels and Tales of Henry James*. Vol. 21 & 22. New York : Scribner's, 1937. 26 vols. 『使者たち』工藤好美・青木次生訳 国書刊行会 1984年
- . “American Letters” from *Literature*, March 26–July 9, 1898. *Essays on Literature, American Writers, English Writers* New York : Literary Classics of the U. S., 1984.
- . *The Complete Notebook of Henry James*. ed. Leon Edel and Lyall H. Powers. Oxford UP, 1987.